

## 亀井宏著『ガダルカナル戦記 [第三巻]』

志賀 吉修

## はじめに

評者が、本書（亀井宏著（1994）『ガダルカナル戦記 [第三巻]』光人社）の書評を思いついたのは、今年（2022年2月）、ロシアのウクライナ軍事侵攻がきっかけである。それから6か月経過しても、解決の糸口さえ見つからず、更に泥沼化してきた。加えて、この問題が、世界各地に波及してきた。例えば、ロシアのウクライナに対する関係は、中国の台湾に対する関係に等しい。つまり台湾有事は、日本有事を意味する。そこから日本の国防費増強を求める声に発展した。より具体的には、ドイツと同様に、国防費をGDPの2パーセント以上にまたは6兆円台の後半を要求する。更にロシアは、問題解決の手段として核兵器の使用を示唆し且つザポリージャ原発を恫喝の手段として使用する。そこで、評者はこの状況を打開する一手段として、軍事史的研究を検討することにした。そこで閃いたのが、著者の本書を含む三部作である。それらは、太平洋戦争中、日本軍が最大の辛酸を味わったガダルカナル島（以下、ガ島と略す）攻防戦を実証的に扱っている。

本書は、前記三部作の第三巻である。それは、太平洋戦争中、最大の激戦地の一つであるガ島からの撤退部分を扱っている。評者は、特に第三巻に興味を抱いた。其の理由は、通常の基本書又は論文では扱わないガ島撤退を詳細に扱っているからである。又軍事史的には、半年後のキスカ島撤退より更に困難だと評価される。著者は収集、調査した膨大な資料から、軍上層部にとって不都合な撤退を「認めさせる起案をした人物」と「実行した人物」に焦点を絞っている。ところで、本書は、8章から構成されるが、評者は、前記目的から、25、27、28章に収斂する。

前者は、真田穰一郎大佐であり、後者は、松田教寛大佐である。著者は、

前記二人を単なる戦争のヒーローとして描いてはいない。状況によっては、ガ島上陸した三万人以上の兵士全員が、全滅しても不思議ではなかった。事実、大本営は、ガ島撤退は、極めて困難であると予想していた。それが、一万人以上の兵士が撤退できたのは、奇跡であった。問題は、そのような奇跡が、上記二人の大佐を含めた人々の沈着冷静な判断行動によって如何に成就されたかとともに、何故、ガ島で悲惨な戦闘がなされたかを問うべきである。

著者は、本書執筆中、生存する旧参謀、帰還兵、および内外の公文書を駆使して前記問いに答えている。我々は、著者が提供する様々な事実から、世界情勢の激変に日本が如何に対応できるか予想することが出来る。たとえば、ガ島撤退より80年経過し、未曾有の困難に立ち向かおうとも、我々が、的確に状況判断し、沈着冷静に行動するならば、逆境を克服できることを、本書は、評者を含めた後世の人々に教えてくれるのである。

## I 第二十五章 方面軍

評者が、“はじめに”で述べたように、今回取り上げるのは、二人の旧日本陸軍大佐の業績である。しかし、いきなり、ガ島からの撤退では、その内容を理解できない。そこで、著者亀井氏の紹介と、ガ島からの撤退に至る時間的経過を略記する。

### 1. 亀井氏の紹介

亀井氏は、1934年（昭和9年）東京都葛飾区に生まれる。三十代半ばから、太平洋戦争に関心を抱き始め、昭和54年、四千枚の大作『ガダルカナル戦記（全三巻）』（光人社刊）で第二回講談社ノンフィクション賞を受ける。主な著書に、『ミッドウェー戦記』『昭和天皇と東条英機』（NF文庫、光人社刊）、亀井宏（2009）『ドキュメント 太平洋戦争 全史』（講談社刊）等がある。

### 2. ガ島撤退までの経過

・昭和16年12月8日、日本軍ハワイ真珠湾を奇襲攻撃、マレー半島上陸、

#### 対英米宣戦布告

- ・昭和17年1月23日、ラバウル占領
- ・昭和17年2月15日、シンガポール占領
- ・昭和17年6月5日、ミッドウェー海戦で日本軍大敗。米海軍反攻に転ずる。
- ・昭和17年6月16日、ガダルカナル島に航空基地建設に着手する。
- ・昭和17年8月7日、米軍がガダルカナル島に上陸する。
- ・昭和17年8月21日、一木支隊（先遣隊）全滅する。
- ・昭和17年9月13日、川口支隊が夜襲に失敗する。
- ・昭和17年10月24日、第二師団を中心とする攻撃が失敗する。
- ・昭和17年11月、第三次ソロモン海戦で、13日戦艦比叡自沈、15日戦艦霧島沈没。
- ・昭和17年12月5日、第二次船舶徴傭問題を收拾するため臨時閣議が開かれた。それは、ガ島攻略の最大の難問は、補給問題であり、船舶問題である。この問題をめぐって、参謀本部第一部長田中新一が佐藤賢了軍務局長を殴打した。加えて、翌日東条首相をも罵倒した。そこで、田中は、転出することとなった。その一週間後（12月14日）、作戦課長服部卓四郎も転出した。彼の後任として、真田穰一郎大佐が着任した。
- ・昭和17年12月31日、大本営は、ガダルカナル島撤収を決定する。

この章で問題とするのは、上記真田大佐が着任し、年末のガ島撤退までのプロセスを検証する。軍の公式文書には撤収を用いるが、著者および一般的には、撤退を用いている。

### 3. 本章の各論

昭和17年12月15日、新作戦課長真田大佐が、作戦課で、一致協力してこの難局を乗り切ろうと話された。二日後（12月17日）、新課長一行（作戦課の作戦班参謀瀬島龍三、航空班参謀首藤忠雄が随行）に「ソロモン方面に至り、第八方面軍と連絡、所要に応じてその作戦を指導」という訓令を受領したので、横浜港から、飛行艇でサイパンへ飛び立つ。同地滞在中に大本営参謀高山信武中佐に会う。高山中佐は、十二月中旬、兵站（軍隊の機関の一つ。戦場の後方で、作戦部隊への軍用品の供給・輸送および補

給線の確保などを担当する任務) 関係の調査のため、トラック、パラオ、ラバウル方面に出張して、そこで南方各方面における全般的補給の状況を視察するとともに、連合艦隊司令部の意向と見通しについて協議してきた。そして、真田大佐に対して、貴重な状況報告をした。このことは、著者が書面で、高山氏に質問し、同氏の書状による答えを本論で引用している。その要旨は、ガ島における今後の戦局は極めて困難である。その原因は、海軍の護衛能力が極めて厳しいことが予想されるからである。現在船舶は最も貴重な戦力である。今次のガ島作戦は、陸軍としては最初の敗戦であるが、限度を超えた猪突猛進は避けるべきであろうと真田課長に申し上げた(本書、414頁)。

真田大佐一行は、トラック島「大和」艦上の連合艦隊司令部を訪れるが、山本長官、宇垣參謀長ともに、儀礼的な話に終わった。まだこの時点では、著者は撤退に関する天皇の允裁(天皇の許可)が得られてない以上やむを得ないとする。このことは、真田大佐の、いわゆる“真田メモ”を引用している(本書、415頁)。

一行は、12月19日午後ラバウルに到着し、12月23日同地を去るまで、第八方面軍司令官以下現地海軍をふくめた各関係者から、個別的に意見を聴取した。又、同地で21日、22日にかけて、ガ島奪還を想定した輸送団上演習がなされた。これは、最大の問題である兵站が可能か否かを判断するために行われた。そして、真田大佐一行は、その演習を見守ることができた。この演習参加者の大部分は、今日の海軍の状態、実力からすれば、「今奪還は至難なり」であった。そして、一行の瀬島少佐も、奪還は非常に困難であるという印象を持った。そして、瀬島は、想像ではあるが、真田課長も同様の印象を持ったとする(本書、419頁)。

一行は、23日ラバウルを発ち、サイパンに向かった。ここからは、著者が、直接瀬島隆三氏から聴取した内容である。24日深夜、真田課長が、瀬島少佐と首藤少佐を呼び、ガダルカナルをどうするか、意見を言ってほしいといわれた。そこで、瀬島少佐は、理由を述べて、撤収が自分の意見である旨を報告した。つぎに首藤少佐にも同じ質問がなされた。彼は、自分の考えも瀬島と同様であると答えた。それらに対して、真田課長も、自分も同感であり、それで行きましょうと言われた(本書、422頁)。

ここに一行の意見は決まった。サイパンから東京までの所要時間は、九時間または十時間である。この考えを早く進めるためには、一刻も早く天皇の決裁を受けねばならない。そこで瀬島少佐は、作戦指導要領案と陸海軍中央協定案を、翌日（12月25日）サイパンから東京へ行く途中、機中で起案した。これがあの大晦日の御前会議の母体になってゆくのである（本書、422頁）。

12月25日、一行は横浜に到着した。真田課長は、参謀総長の官舎に行き、総長、次長、新第一部長に報告した（本書、423頁）。瀬島少佐と首藤少佐は、参謀本部に行って、辻正信班長以下に報告をした。撤収という言葉をも初めて出したが、誰一人として異論をとらえたものはなかった。翌26日、真田課長が軍令部の作戦課に行き、軍令部総長、次長、部長に説明に行った。さらに27日、28日、参謀本部、軍令部から二名ずつ出席して、撤収の実際について相談する。

当初、年明けの1月4日に予定されていた御前会議は、事態を重く見た天皇の意向で、年内12月31日、宮中大広間で開かれることになった。杉山参謀総長と永野軍令部総長が上奏し、天皇が決裁し、ここにガ島の撤退が正式決定した（本書、427頁）。

上記の如く決定したガ島撤退の正式決定を陸海軍の末端まで伝達するのが極めて困難である。陸軍では、大命案を携行した大本営陸軍第一部長綾部橋樹少将は、昭和18年1月4日、ラバウルの第八方面軍司令部に到着した。今村均中將は、ガ島撤退指達を聞いた。海軍では、福留繁中将が、トラック島の連合艦隊司令部に同内容を伝達した。こうして現地陸海軍は、まさに百八十度の転換である撤退に向かって動き出す。しかし、現場の参謀たちも、あれだけ見事な撤退作戦が実行できるとは考えていなかった。其の理由は、長期の戦闘に疲弊しきっている部隊を一つ所に集めて、海岸から艦艇に乗せて後方に運ぶことは、前代未聞のことだからである。計画策定にあたって最も問題となったのは、いかなる手段でガ島上の兵力を後方に運ぶかであった。現地の参謀たちは、高速の駆逐艦しかないだろうと考えた（本書、432頁）。

つぎに、このガ島撤退案を、だれが前記島の第十七軍に伝達すべきかが問題となった。当時、ラバウルとガ島との通信はほとんど不通であった。

結局井本熊男中佐と佐藤忠彦少佐が行くことになった(本書、434頁)。そして前記二人と矢野大隊および通信隊が、ラバウルを出発したのは、昭和18年1月12日午後5時のことである。一夜が明けた13日朝、ショートランドについた。午後この泊地で陸海共同の訓練が行われた。そして、14日正午、ショートランドを発し、全力で南下した。

## II 第二十七章 転進命令

### 1. 本章の要点

前25章で決定されたガ島撤退の命令が、ガ島まで如何に伝達され、且つ末端の兵隊まで行き届いたか、または届かなかつたかを検証する。東京からガ島まで直線で5,500kmの距離が存在するように、撤退命令がその間を円滑に伝達されるかは、極めて困難な状況であった。ましてや、撤退というより、全滅に近い状況での敗走は、殆ど不可能であり、その間の理解なくしては、2大佐たちの業績は、理解できない。

### 2. 本章の各論

前記の如く、ショートランドを出発した一行は、無事ガ島の西北端エスペランス岬(本書の図、ガダルカナル撤退図、609頁)に入泊でき、揚陸が15日午前零時25分に完了した。この後、井本参謀一行は、同地の兵隊たちのあまりにやせ衰えた容貌に衝撃を受けた。しかし、一行は一刻を惜しむように、第十七軍司令部へと向かった。同日午後8時過ぎ、軍戦闘指令所にたどり着いた。そこには、井本氏と親しかった軍参謀長宮崎周一少将がいた。やがて小沼治夫軍参謀も現れたので、前記二人と井本、佐藤参謀の四人で協議をした。まず、井本参謀が、今回の撤収作戦に関する大陸命および第八方面軍命令を伝え、それに至る経緯を説明した。現地参謀たちは、それぞれ抗議し、撤退は不可能であるといった。最後まで押し問答となり、軍司令官(百武晴吉中将)の決裁を仰ぐこととした。

翌朝(昭和18年1月16日)、井本参謀は、司令官に会った。参謀は、今村中将から第十七軍司令官百武中将宛親書を預かっていた。それを渡し、命令の一切を伝え、連絡事項を詳しく説明した。百武中将は、可能な限り

慎重に熟慮の末、万難を排して大命を遂行することを決裁した（本書、533頁）。同日正午頃、百武中将は、井本参謀に、軍を撤収すると伝えた。そして中将の決心は第八方面軍に打電された。

17日の午後になって、幕僚長以下幕僚全員が、一致し撤退の方針にそいできるだけの努力をする、という申し入れが井本参謀に対してなされた。その日の夕刻、作戦主任参謀の小沼大佐が、第二師団および第三十八師団司令部に赴くことになった。小沼大佐が第三十八師団に到着したとき、同師団は、第一線の部隊長に玉砕命令を出した後であった。したがって、師団参謀から猛烈な反対を受けた。しかし、ガ島撤退は、天皇の命令であるということで最終的に受け入れられた。次に第二師団も納得したので、小沼参謀は、軍司令部に引き返した（本書、537頁）。

次に将校を皆使って第一線に連絡に行くという手順をとった。大隊長クラスまでは直接師団司令部から連絡した。だがガ島を退くという真実は、各部隊長かそれに準ずるものに限られ、一般の将兵には知らされなかった（本書、542頁）。著者は、こうして前線の兵士が何ら連絡を得ないまま、絶望的になり、玉砕した例を列挙している。

### III 第二十八章 終章

#### 1. 本章の要点

ガ島撤退は、3回にわたって、（2月1日、2月4日、2月7日）実行された。各々の撤退にドラマがあった。そして、松田大佐の撤退は、第三回目であった。古来より、戦いの殿が一番勇気のいる部隊であることを実感できる。

#### 2. 本章の各論

昭和18年1月18日正午、第一船舶団長伊藤忍少将に下達した次の乗船計画が、百武軍司令官の発した最初の撤収に関する命令となった。エスペランス海岸とカミンボ海岸にて駆逐艦による撤収と、2月1日、2月4日、2月7日の三日間に及ぶ大雑把な撤退の概要が発表された。しかし、百武中将以下軍司令部の乗船時期と、残余部隊とされる第三次撤収部隊の指揮

官など細目は明らかにされていない。

昭和18年1月21日、前年8月に戦死した第二十八連隊長一木清直大佐の後任松田教寛大佐が着任した。松田大佐は、第十七軍参謀長宮崎周一少将や前任者一木大佐と士官学校同期であった。松田大佐は、こののち総後衛部隊の指揮官に任命され、第三次撤収を指揮することになるが、ガ島到着時、本人はそうなるとは予想もしていなかった。評者も、彼の選任理由を何度も熟慮したが、的確な答えを探すことが出来なかった。あえて、卑見を述べれば、前記士官学校同期の宮崎氏、一木氏との関係および愚直な人柄がその選任理由のように思われる。

昭和18年1月20日、三度目の転進に関する軍命令は、総括的命令であった。その命令受領のため、第二師団、第三十八師団から、各参謀が来ていた。宮崎軍参謀長から口頭の注意があり、動けぬ者は自決させるようにとの指示があった。命令の要点は、第一次撤収に第三十八師団、第二次撤収に第二師団が主体となることである。そこで第二師団長丸山政男中將は、前記命令を忠実に実行しようと思ったが、その後の現実、中將の思い通りにはならなかった。諸般の事情により、丸山中將は、第二師団の各部隊を期日前に撤退する命令を発した。米軍の侵攻が激しく、当該師団としてはやむを得ずと判断したのだが、第三十八師団および第十七軍司令部の不評を買った。ガダルカナルの最終段階は切羽詰まっていた。崩壊寸前だったのは、第二師団のみではなく、軍全体が崩壊に瀕していた(本書、611頁)。

昭和18年1月22日、百武中將は、第十七司令部約二十名を連れて、エスペランスに向かっていた。中將は、途中、一木大佐の後任、松田教寛大佐に会った(本書、616頁)。総後衛部隊に関する正式な軍命令は、2月4日に下達されている。この時宮崎軍参謀長は、松田大佐に声をかけたが、第三次撤収は困難だと内心想っていたので、その声は、震えていたとの某生還中尉の証言がある(本書、616頁)(宮崎周一、1956、134頁)。

昭和18年1月23日払暁、百武一行が、目的地エスペランスに着いた。この直後、百武中將は、第二師団の独断早期撤退を知った。

昭和18年1月27日、第一回撤収命令が下達された。同日の井本熊吉参謀の日記によると、百武中將以下軍司令部が、第二次の撤収で離島すると記録する(本書、619頁)。

昭和18年1月28日正午、第三十八師団長佐野忠義中将に下達した命令で、乗船日を一月三十一日と明らかにした（本書、620頁）。そして、その命令の中で、第三十八師団の第一次輸送部隊を、エスペランス乗船組とカミンボ乗船組とに分けた。この間、日本海軍は、米空母部隊のガダルカナル接近を知らなかった。そして米軍の方は、日本軍がガ島から全兵力を撤収しようとしていることに、まったく気づいていなかった（本書、629頁）。

昭和18年2月1日、第一次撤収が決行された。駆逐艦の到着は、南下中、敵飛行機の攻撃に遭遇し、一隻が航行不能に、他の一隻が救助のため現場に残ったため、一時間遅れた。因ってエスペランス海岸、カミンボ海岸にそれぞれ、千余名、約三百名が取り残された。翌日午前10時、ブーゲンビル島エレベント婦島。揚陸人員、陸軍5,164名、海軍250名であった（本書、639頁）。

昭和18年2月1日、百武軍司令官は、「第二師団の乗船」等に関する命令を達していた。第二次撤収の期日は、2月4日、乗船場所は前回同様、エスペランスとカミンボである。但し、今回は、第二師団を援護してくれる師団はない。故に、自己師団で、敵の前進を阻止しつつ、揚陸点まで転進せねばならない。この時、松田部隊は、師団主力の掩護を命じられて、依然として急には下がる事が出来ない（本書、643頁）。そして二日には、他の部隊一部を合わせ指揮し、別命あるまでセギロウ以東において、なるべく遠距離に敵を阻止し、第二次揚陸（乗船）を援護すべしという軍命令を受理した。

昭和18年2月3日、1月7日にガ島に上陸した軍参謀山本筑郎少佐が松田部隊本部に到着した。前記少佐は軍参謀の中でただ一人だけ残った。セギロウで松田大佐と会い以後後衛部隊約二千名の将兵と運命を共にすることになる（本書、654頁）。この時、山本少佐は、松田大佐に対し、撤収作戦の全般を説明した。

昭和18年2月4日、百武軍司令官は、次のような「松田部隊指導要領」を策定して、松田教寛大佐を正式に総後衛部隊長に任じた（本書、656頁）。そして詳細な指示——第二次乗船完了までセギロウ河以東の要線を確保し、敵の攻勢を阻止して第二次乗船を援護せよ——であった。

昭和18年2月4日、午後11時ガ島出発前、百武中将は、松田大佐に対して、「第二次揚陸ハ奏功セリ」と電報して、以後、在ガ島の陸海軍全部隊の指揮を執ることを命じた(本書、657頁)。エスペランス隊とカミンボ隊とは、5日午前、ブーゲンビル島エレベントに到着した。百武司令官は、上陸地点で、参謀次長田辺盛武中将以下の出迎えを受けた。

この後、総後衛部隊長松田大佐には、二つの重大な任務が負わされた。その一つは、バヒ(ガ島西北部とは反対側にある地名)付近に上陸した敵の処置である。もう一つは、海軍側が第三次の駆逐艦輸送を拒絶した場合の対策であった。舟艇機動(本書、673頁)でソロモン海を航行できるかという難問である。この点、松田大佐は、同島に到着したばかりの船舶工兵第三連隊松山作二中佐に聞いた。中佐は、言下に「自信がない」と答え松田大佐を落胆させた。そこで、松田大佐は、第八方面軍参謀長加藤鑰平中将あてに、駆逐艦輸送を絶対必要とする旨の緊急電報を打った。著者は、これら公式文書から、松田大佐の残留部隊を何とかしてガ島から脱出させたいという執念を読み取ることが出来るとする。話は、前に戻るが、松田大佐は、山本筑郎参謀に、残り少ない弾丸を撤退の最後まで、小出しに、また間隔を置いて発砲し、わが方の健在を誇示するようにと、細かく指示している。

ここに細心の注意を傾注した松田大佐の愚直な性格が見事に描かれている(本書、671頁)。

昭和18年2月6日午後4時、乗船に関する命令が下達された。同日、夜半に至るまでに、松田大佐は、ラバウルの第八方面軍から何本もの電報を受け取った。「駆逐艦の入泊は七日二一〇〇。第三次以降においてはたとえ残留兵員ありとするも駆逐艦または潜水艦をも派遣し得ざるにつき、全兵力を第三次において前進せしむるごとくとくに配慮」等であった。最後の通報であった(本書、688頁)。

昭和18年2月7日午後9時20分頃、全艦無事カミンボ泊地に到着した。そして午後11時収容作業を終了した。帰途の途中、総後衛部隊長松田教寛大佐他一名の連名で、第十七軍司令官百武春吉中将、連合艦隊司令長官山本五十六大将等宛、次の電報が打たれた。

「二月七日二二〇〇、二万ノ英靈ノ加護ニヨリ、『ガ』島残留ノ総員一

千九百七十二名ノ収容完了シタルヲ報告ス」(本書、692頁)。

## おわりに

著者が、本書を上梓した昭和五十五年前後は、太平洋戦争の生存者が、未だ健在であった。著者は、彼らと精力的に対談、書面によるやり取り、可能な限り内外の公文書を渉猟した。研究者として、膨大な研究対象の調査は、並大抵の努力ではできない。著者は、信の置けない無名の物書き風情に、余計なことをしゃべることへの警戒心が如何に強かったかと、述懐している(本書、576頁)。そして、本年(2022年)は、戦後77年経過し、先の戦争を知らない世代が、九割近くになる。その様な状況において、ますます著者のように、直接戦争体験者に面談し、習得した事実から、その戦争の本質を語るのは、価値があるはずである。ましてや、太平洋戦争中、最大の転換点、最大の激戦地の一つ、ガ島攻防を検証する事は、ただ過去の事実の検証にとどまらず、未来を“創造”する為の貴重な道標となるはずである。

今回、評者が、特に取り上げたガ島撤退に関与した二人、真田穰一郎大佐と松田教寛大佐も決して、彼ら自身だけの力で成し遂げたわけではなかった。前者については、瀬島龍三少佐(「転進」、これは瀬島が考案した言葉、新井喜美夫、2008、140頁)、首藤忠男少佐、高山信武中佐等が真田大佐を上手に助け、大佐も彼らの意見を合理的に咀嚼した。後者では、山本筑郎参謀、井本熊男参謀、小沼治夫参謀(あと三日撤収実施が遅れていたら日本軍は全滅していた、本書、531頁)、宮崎周一参謀長等の存在があった。こうした優れた専門家の意見を聞き、沈着冷静に判断実行したが故に奇跡の撤退はなされたのだ。

最後に、著者は、本書で何を言いたかったのか。「ガダルカナル戦というのは、最初から日本全体の国力の彼方にあった(本書、108頁)」。別の言い方をすれば、参考文献(半藤一利ほか5名、2005、326頁)でも述べているように、「自分の身の丈を知ること」、「攻撃の限界を超えないこと」、日本人は、超えてしまったのだ。その失敗を弁えることが、あの戦争の最大の教訓であると、半藤一利は述べている。前半の提言は、中西輝政による。

細かい批判点を述べれば、時間的整合性がない点および生存者の証言が重複する点が、二、三見られた。但し、前後を辛抱強く読めばわかるはずである。すると本書の理解も更に深まり、読書の喜びも増すはずである。

加えて、評者は、愛知大学豊橋図書館内の「江口圭一文庫」を活用できた。江口氏蔵書の数量および質の高さに圧倒され、このような資料の閲覧とコピーを許された本研究所、豊橋図書館およびメディアセンターに感謝を申し上げたい。

今年(2022年)は、太平洋戦争敗北(1945年)より77年が経過する。この間は平和の時代である。また明治維新(1868年)から前記敗北(1945年)までの77年間は戦争の時代であると某テレビは報じた。これは、単なる偶然であろうか。もう一度、“はじめに”に戻ると、ロシアのウクライナへの軍事侵攻は、何か、今までとは、違うことが、換言すれば、再び戦争の77年間に起こりそうな杞憂に襲われるのは、評者のみであろうか。もし、評者の取り越し苦労が、現実のものとなったとき我々はどう対処すればよいのか。そんな時、ガ島撤退で見せた、あの二人の大佐の業績こそ、我々に光を投げかけるのではないだろうか。その様な、理由で、通常の「書評」とは違う形式となったが、評者としては、この拙い方法が、自己の生きがいであり、自己存在を示すものであることを認めていただければ幸いである。

## 参考文献

- 新井喜美夫(2008)『転進 瀬島龍三の「遺言」』講談社  
江口圭一(1982)『昭和の歴史4 十五年戦争の開幕』小学館  
亀井宏(1994)『ガダルカナル戦記 [第一巻]』光人社 NF 文庫、光人社  
亀井宏(1994)『ガダルカナル戦記 [第二巻]』光人社 NF 文庫、光人社  
亀井宏(1994)『ガダルカナル戦記 [第三巻]』光人社 NF 文庫、光人社  
亀井宏(1974)『ミッドウェー戦記』光人社 NF 文庫、光人社  
亀井宏(2009)『ドキュメント 太平洋戦争全史』講談社  
木坂順一郎(1982)『昭和の歴史 第七巻 太平洋戦史』小学館  
高木惣吉(1959)『太平洋海戦史 [改訂版]』岩波新書(青版)12、岩波書店  
林茂(1967)『日本の歴史 25 太平洋戦争』中央公論社  
半藤一利・保坂正康・中西輝政・福田和也・加藤陽子・戸高一成(2005)「日

本負れたり あの戦争になぜ負けたのか』『文芸春秋 2005年11月号』文芸春秋、261-327頁

宮崎周一（1956）「地獄戦線よりの脱出—ガダルカナル撤退作戦の真相—」『別冊 知性1 太平洋戦争の全貌』河出書房、122-134頁

由井正臣（1977）「太平洋戦争」『岩波講座 日本歴史 21 近代8』岩波書店、53-107頁